

浄土

1978-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (新聞紙類) 第三五号
昭和五十二年四月二十五日印刷
第四十四卷 第五号



S. Kurz

「子供の日に思う」



若葉映ゆる好季。大地自然が、のびのびと活動が続けている、まことに爽やかなこの頃である。

そんな折、あるエピソードを思いだす。

× × ×

二児目の出産を無事終え、一週間ぶりにわが家に帰った夜、三歳になったばかりの長男が泣きながら起きてきた。

「どうしたの、オシッコ」

「ちがうよ、恐い夢見たんだ、ママが注射さされていて、泣いてるの。助けてやろうと思っても、身体が動かないの。そのうち、ママが、どんどん遠くへ行っちゃうんだもの」

出産のことなど、何も知らず、初めて母と

別れて過した一週間が、子供には、とても長く、そして孤独な時間であったのでしよう。

この子供の純真な心情を、母親として出来る限り、今後の保育、成長していくなかで生かしてやろう、そう決心いたしました。

× × ×

ひたむきな子の心、わが子をいとおしむ母の心、そこに育まれた母子の情愛なるがゆえに、至極当然のことといってしまうとそれまでもかもしれない。だが、そう簡単にはかたづけられないと思う。その深奥を見極めなければなるまい。

「ほら、もう大丈夫よ、ママは、ちゃんとここにいてしょ」
「もう、どこへも行かないね」
「行きませんよ、ター坊といつも一緒よ、さあ、安心して寝ましょうね」

テレビ人間に代表される、今日のような情報過多の社会のなかで育つ子供たちは、必要以上の知識を与えられている。それが有益なものであれば言外であるが、すべてがそうであるとは限らない。また、そうした有害なもののように、より興味を覚えるのが子供ごろであり、純真なるがゆえに、より一層感化されやすいともいえる。

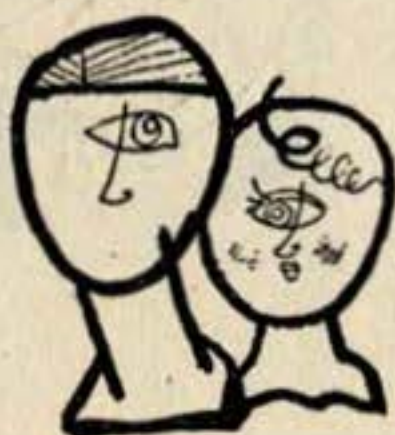
求めても、求めても得られず、わが往く道を探ね、探ね求めた、かの善財童子のような子供は、今日まずいないであろう。時代の変遷からしても、当然のことである。しかし、そうした心を持っている子供は無限にいる。

そこで、大人側の適切な導きが必要となってくる。如何ようにでも染まる要素を持つ子供ごころを、より鮮明に、より美しく染めぬいてやらねばならない。これは、次代を背負って立つ子供たちに対する、大人側の最少限の責務であろう。

今年も、そこここに、鯉のぼりが緑風にはためいている。あの鮮やかな色合いに思いを馳せ、子供ごころを傷つけず、確実に育てあげたいものだ。

(長谷川宣丈)

五月号



難行道ハ陸路ヨリ歩行スルガ
ゴトシ、易行道ハ水路ヲ船ニ
乗ズルガゴトシトタトヘタリ
——『逆修説法』

目次

法話

おかげさま……………大橋英正……(2)

わが歩み……………金田恵光……(6)

利休と仏教・その「佗び」(二)……………河野喜雄……(24)

自然を考える②<旅と自然>

スリーランカのシギリヤを訪ねて……………金子貫達 ……(10)

旅と自然—五浦の旅より—……………賀幡亮俊 ……(14)

桜便りの苦悩……………松平実胤 ……(19)

法然上人と弟子たち①

宇都宮一族のこと〔一〕……………梶村 昇……(28)

浄土句集……………一田牛畝選……(33)

<読者の声> 旅と信仰 ……………中村清吉……(34)

<新刊紹介> 『法然と浄土宗教団』(大橋俊雄著) ……………(36)

<表紙裏・巻頭言> 「子供の日」に思う……………長谷川 宣丈

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



おかげさま

おおはし えい しょう
大橋 英正

(大本山増上寺執事・教務担当)
(東京・芝長谷院住職)

○ゴメンナサイ

二年八カ月になる孫がいますが、少しずつ、人まねをしながら、自律期にはまだまだとは思いますが、それでも漸々に自分を育てつつあるように思えます。いや、育てられつつあると申せましょう。

はじめての、しかも女の子であるためか、駄々をこねたり、無理を通そうとしたりして、人を困らせることは、余りありません。ある時は、母親の通訳がないと、話しを通じないこともあり、また、思うように自分の意思の伝達が果せないようなときは、少々焦れることもありま

すが、どちらかと言えば、女の子だけに、育て易い部類に属しましょう。

私にとっての孫ともなりますと、自分の子供達を育てあげる時とは違って、直接の当事者でないこともあって、比較的に客観的な立場で観察できる関係から、冷静に見つめることができますが、時には、ハツとさせられるようなことを口にしたり、態度に表わしたりすることがあります。「子供は人間の父」とは、さるイギリスの詩人がうたった言葉ですが、考えようによっては、その天真爛漫さの故に、却って、私どもの師ともなり、父であるとも思われることが、間々あります。

その孫が、最近になって、悪戯の度が過ぎる時などに、母親から厳しく叱られることがあります。その時、何のためらいもなく、口癖のように、「ゴメンナサイ」を連発することがあります。には、ほほえましいと同時に、

胸をつかれる感じとなり、また一種のすがすがしさをすら感じさせられます。

もちろん、小さい者には、小さいながらに、何らかの計算が全くないとも言えないでしょうが、母と子との、やりとりの様子をみていますと、孫の「ゴメンナサイ」には、何かしら教えられるものがあります。

翻って一般の社会を考えてみますと、最近、自己主張が余りにも多すぎはしないでしょうか。時には、その主張が余りにも急なため、他人の立場に思いを駆せる心のゆとりをなくして、そうでなくとも、住みにくいこの世の中を一層住みにくくしている場合が、少くありません。

宗教的な生活を考えるときは、自分の罪業の深さに、思いを極めて、アミダ如来サマに、お縫りする筈の私どもが、日々の生活の営みの中では、自分を絶対視して、自己が法であるかの如くに考え、他をないがしろにするようなことのある事実、深い反省をせざるを得ません。

○もったいない

①おそれ多い、②有難い、③やたらに使っては惜しい、④神仏、貴人に対して不都合な振舞だ、⑤罰が当たる。

「勿体ない」についての、手許にある辞書の解説です。「やたらに使っては惜しい」ものを、何の配慮もなく、使い捨てにしてしまう。衣・食・住や経済機構の関係で、ものを保存するに困難を感じることに起因しているかも知れませんが、それにしても、もう少し、ものを大切に扱い、生活の智慧を働かせて、ものを活かして使い、「勿体ない」の考えを普及徹底したいものです。

「消費は美德なり」とは、高度成長経済がその極に達し、それが謳歌された時代には、私どもが屢々耳にした言葉であります。それが、オイル・ショック以来、打ち続く不況のため、頭を冷されまして、強い反省をうながされつつ今日に到っておりますが、物資の豊かなアメリカに於てすら、リジェイス（くず物やガラクタ類を、他のものに、再使用する）の運動が話題となつてから、もう数年にはなるでしょうか。

自然から受けている恩恵を、当然わがもののように考えて、人間の恣意にまかせられているが如くに錯覚し、

無制限・無節操にその資源を濫費し、節度を度外視した人間本位のこの浪費によって、僅々百年間に、著しく自然環境を破壊して、自然界の調和をそこない、所謂公害という天からの罰を蒙っている姿に、私どもは深刻な反省と、ものの有難さを再認識するよう要請されているとも言えましょう。

近ごろは、わが国でも、資源の節約・確保という見地から、その再利用・再生・再開発とかいったことが、問題として、とり上げられているようですが、本来、当然考えねばならなかった問題ではないでしょうか。

○有難う

「勿体ない」の説明にありましたように、「やたらに使っては惜しい」という気持がいっぱいともなれば、そのものを大切にし、その価値を十分に認識するに従って、それを用いる者は、必然的に、「ありがたい」の気持が表われ、「ありがとう」が、口をついてでることになります。

英語を母語とする人々は、何らかの面倒をかけたとき、お世話になったときなど、気軽に、しかもいとも自然に

「アリガトウ」が口に出て、双方の対応に滑らかさを与えていますが、私どもも、でき得る限り「有難う」の生活に終始したいものです。

ひとは、社会と全く隔絶して、唯ひとりでは、自分のちを全うすることは許されません。大自然の恵み、社会から受ける数えることのできない程の、さまざまな恩恵をうけなければ、一日たりといえども、私たちの「生」を全うすることはできません。このように、私どもは、生命のあるかぎり、天地自然や社会等の恩恵をうけていることになり、それによって生かされているこの事実こそ、まさしく、「有難い」と言わねばなりません。

食事一つを例にとってみても、食作法（エトワ）の五観に、一つには、功の多少を計り、彼の来処を量る

とあり、

二つには、己が徳行の全欠多減を付る

と言われ、

最後には、道業を成せんが為にして、世報は意に非ず

と結んでいます。

縁によって、天地の恵み、諸々の人々の労作の諸恩を蒙り、いまこの食をいただく、ほんとうにありがたいことと、感謝せずには、いられません。

知恩は、やがて報恩へと発展します。自分のうけた恩を、感ずれば感ずる程、それに対してご恩返しを心掛けることにもなり、それが大きければ大きいだけ、還相回向ともなり、文字通り、浄仏国土、成就衆生の途が開けてきます。

○おかげさま

「恩を知るは大悲の本、善業を開く初門」とは『大智度論』に説かれたものといわれますが、「ありがたい」の気持は、一方では、必然的に、しかもごく自然に、合掌の生活へと進展します。宗教の世界への帰投・帰入であります。善導大師のお導きによれば、私どもは、「罪惡生死の凡夫」であり、「曠劫よりこのかた、常に没し、つねに流転して、出離の縁あることな」いものであるとの、お示しがあり、「むさぼり」と「いかり」と「おろかさ」との三毒に染汚されたものであり、どこをとっても、何一つ満足なものはありません。わが身を反省し内省すれ

ばする程、自分がいかに矮小なものであるかを思い知らされます。しかし幸いなることに、阿弥陀仏は、四十八願をもって「衆生を摂受したもう」のであります。「疑いなくうろたへ慮い無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得」るのであります。

また、『勅修御伝』第三十二に、

「この酬因感果のことわりを、大慈大悲の御心のうちに思惟して、年序そらにつもりて、星霜五劫におよべり—中略—しかも、われ別願をもて浄土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし—中略—万行万善の果徳円満し、自覺覺他の覺行窮満して、その成就せんところの、万徳無漏の一切の功德をもて、わが名号として衆生となえしめん」

とあります。いままで考えてきたことも、すべては凡愚の浅はかな思慮であって、究極するところ、われわれの生活は、悲智円満のアミダ如来に光被せられた日々の営みであることに思い及び、心の底から、「もったいない」、「ありがたい」、「おかげさま」と叫び、「なむあみだぶつ」と称名せずにはおれないものであります。なむあみだぶつ。



わが歩み

かねだえこう
金田恵光

(前大正大学米英文学主任教授)

明治四十年十月十七日、東京府練馬中村にある真言宗豊山派の寺院、南蔵院住職金田有円の長男としてこの世に生を受けたが、故あって五歳のとき群馬県碓氷郡原市町八本木の満福寺へ父母にともなわれて移り、土地の小学校から県立制旧高崎中学校へ進み、同校修了後、つづいて大正大学予科に入学、昭和五年三月、同大学英文科を卒業し、同年十月アメリカへ留学、当時は船で行くよりほかに方法はなく二週間もかかる長い船旅で、いまその頃を思いだしても心細いかぎりであった。太陽が西の水平線に沈むときの夕焼の美しい光景を眺めているときの淋しさは、たえがたいものがあつた。

昭和九年の秋帰国、翌年四月より豊山中学の英語教師となり、同時に友松円諦師の秘書として、また同師主宰

の国際仏教協会の研究生として、友松師の多様性ゆたかな仕事に協力したが、妻と知りあつたのもその頃であつた。友松師はまさに縁結び、私ども夫婦にとっては忘れえぬ人である。

国際仏教の事務所は当時、西銀座五丁目あたりの菊地ビルの中にあつたと記憶しているが、その事務所の訪問客が協会の主事と談合しているとき、余り遠くは離れていない机にむかっていた私の耳にきこえてきた話しの内容は、いたく私の関心をゆりうごかしたことはいまでも記憶にあざやかに残っている。それは駐日ポーランド大使館で、通訳翻譯のできる人を求めているということであつた。私は一面識もないその訪問客(その人の名前は、酒井温理といった)に、その大使館の仕事はだれでも申し

出てもよろしいかと質問をしたところ、その人は、酒井からきいたといえはよろしいと、あっさりした口調で答えてくれたので、正直のところ生活が苦しかった私としては内心よろこびをかくすことはできなかった。翌日のことである、私が三田の綱町にあるポーランド大使館を訪づれたのは。胸のときめきをじっとおさえて、応接間でまたされていた時間は格別に長く感じられた。五分位たったころ長身の眼鏡をかけたポーランド人が応接間に入ってきた。彼は雑誌のようなものをもっていた。簡単な自己紹介がすむと、部屋の一角に小振りのデスクの上のタイプライターを指しながら、この雑誌の中の三頁ほどの論説を訳すようにといわれた。その雑誌を手にとつてみて、はじめてそれが外交時報という外交問題を専門に扱う専門誌であることがわかった。これは生やさしい作業ではないと思ひながらも、限られた時間内に一応翻訳をすませた時、例のポーランド人が入ってきた。彼はタイプした訳文をもつて部屋から出ていったが五分もたつと、ほほえみを口許にうかべながら、また部屋の中にもどってきた。私の訳文は合格だといひながら私に握手を求めた。更に彼は私に明日から二週間、オン・プロベ

イションということであるから二週間後に正式に採用するかどうかを決定するといった。二週間後私は正式に採用がきまった。そのとき私が十四人目の志願者であると教えられ、これこそ縁が深いのだと自分自身にいいきかせたものだった。給料は百五十円、当時としては破格の給料であるといつても過言ではない。一流の大学の卒業生の初任給が七十円という時代であつたことを思えば、一躍大金持になつたような気持になつて妻と手を取りあつてよろこんだ。

友松師の真理運動本部には、もはや勤務はゆるされな。第二次世界大戦の幕があいて、全世界は戦乱の渦にまきこまれ、ポーランドはドイツ軍に占領され、それまで親日国であつたポーランドと、ドイツと枢軸関係にあつた日本は外交関係を断絶させた。七年間も勤務したポーランド大使館は閉鎖され、帰るべき祖国を失つたポーランド大使館員は、大使夫妻とその子供たちをはじめ全部の館員は、やむなく上海へと追われるように日本を去つた。悲嘆のどん底に苦しむ大使一行を長崎港まで見送つていったのは私だけであつた。いかに日本外交が主体性を失ない、ドイツ一辺倒であつたかを証するに余りあ

るものがあるといわざるをえない。長崎港で涙の別れをして帰京すると外務省の儀典課長は、たまたま空席のスイス大使館通訳の仕事を幹旋してくれた。

やがて日本海軍による真珠湾奇襲攻撃で悲惨な太平洋戦争が本格的に開始されて以来、比較的静かなスイス大使館は、日本にとっての敵国二十八カ国の利益代表としての仕事を一手に引きうけるはめになり、数人の外交官と三、四名の日本人で構成されていた大使館は、一挙に館員は数倍に増員され、日本人も十名を越す大所帯になった。毎日発行される官報の中の敵国出先機関の財産管理に関する省令は即座に翻訳されて暗号電報となってスイス本国政府に打電され、またその反応が返電されると、公文書としてスイス大使は日本の外務大臣に提出するという仕事で大使館はてんてこまい。昭和十六年に開始された太平洋戦争は、かくして昭和二十年八月、日本無条件降伏。漸く平和がもどって日本政府は国力回復に全力を尽し、その手段の一つとして貿易振興政策があった。それは全国の中小都市に貿易館を建ててその土地の物産の海外進出の幹旋をはかったが、終戦後数年たってのことではあったが、私は高崎市貿易館々長として高崎市へ

招かれた。同時に高崎市立短期大学の講師も兼任することになった。小規模な田舎の業者の製産能力には限界があり、とうてい外国からの引き合いに応ずることは殆んど不可能に近いことが判明、高崎のみならず他の都市の貿易館は閉鎖するか他の目的に転用されるはめになったのである。従って館長の私は短大専任となって、昭和十二年まで勤務。思想的に混乱していた当時の日本では新生の短大にも、いわゆる進歩的学者と称する輩がその勢力を伸そうと老かいな手段を講じて私たち保守的教員の追いだしを計画、その手にのった当時の市長は彼等の味方となって盲目となり遂に十三名の保守的教員は大学を去ることになった。

その頃、妻と五人の子供をかかえて生活苦と戦っていたかねばならなかつたので、知人を頼って青山学院に職を求めようとしたが成功しなかつた。けれども青山学院の事務局においてきた私の履歴書は、思いがけない方面にわたった。それは横浜の成美学園という女子の学校で、突然辞職した英語教師の後任者を至急に探す必要にせまられ青山学院へ英語教師推薦を依頼にやってきた。そのようなことから私の履歴書が成美学園にわたり、田舎に

いた私宛に來校依頼の電報がきたのであるが、なんとその電報は四月一日に配達されたので、エイプリル・フールを知っていた私には真実のこととは考えられなかった。が家族をかかえていた私は、だまされたつもりで、その電文にすなおに従うことにした。桜木町駅で下車、駅前の郵便局でその電報をみせたところ、そのセイビというのは女子の学校でもと横浜英和と呼んでいたということを知ることができたので、その足で成美学園へ乗りこんだのである。学園長とか宗教主任に会っておどろいたことには、私の名前が授業時間表に既に書きこまれていたのだから、否応なし。成美学園の教師を志望したのでもないしまた、待遇条件についてなにも話しあつてはいないし、ましてや成美学園の教師になることを承知したわけでもない。けれど人間の運命などというものは、自分が意図していない方向へと流されてしまうもののようにある。どうにもならない大いなる力が作用しているように思われるのである。かくして私は昭和三十二年四月から昭和四十二年三月まで成美学園の教師であつたが、その間、大正大学には恩師松浦一先生がまだ御健在だったので、半日二講座を先生と豊川玄雄先生のお骨折

によつて担当させていただくようになった。そして今日に至るまで母校の教師として、七十歳を迎えるこの日までに楽しく教壇生活を送ることができたことは、まことにありがたいことであると、ただただ感謝あるのみで仏縁仏恩に報いることが出来るような余生を送りたいと念願している。

過ぎてし七十年という歳月を回顧するとき前述した如く、職を転々と変わったのみならず、この世に生を受けて五歳のときから居住地が移り、中学校卒業後は大正大学々生として目白の豊山学寮で生活し、大学卒業後は米国へ留学、留学中も住居はロスアンゼルス、バサデナ、アイオワ州インディアナポリスと転々とかわり、帰国後もまた大森、目白、三田、戦争中は神奈川県鶴沼、軽井沢と転々、戦後は横浜と、よくもこんなに居住地を移転したことかと、われながらあきれてしまう。仕事も居住地もみな自分の意志によつて転々と変つたのではなく、自分の意志を超越した力が——トマス・ハーディのインマネント・ウィル——人間を操り人形のように操作するのではなからうかと思われるのである。

自然を考える

(二)

——旅と自然——

スリランカのシギリヤを訪ねて

——一五〇〇年前の王室の惨劇を

岩盤の極彩色美人画は語る——



金子貫達

(長崎市聖徳寺住職)

低成長、不景気の時代となったが海外旅行は衰えを見せていない。お茶の国というより宝石の国といった方がいいスリランカは、なお今以て魅力ある観光国であるようだ。

多数の海外旅行社の案内書を見るとスリランカがシンガポール、又はインドと組合せて宣伝してある。

スリランカに行った人の話を聞いてみ

ると、コロンボ、自然動物園、キャンディの仏歯寺を巡ってセカセカと宝石を仕込んでシンガポールへ飛ぶケースが多いようだ。

私は幸いにもスリランカのほぼ中央部で、中世の首都ボロンナールワから約四〇軒西にあるシギリヤという部落に一泊して、問題の大岩石山、即ちシギリヤロックを視察することが出来た。

部落といったが、家らしい家は四、五軒が離れ離れに散見される程度で、私の泊ったレストハウスはドライブインと言った程度のものであった。

このレストハウスから東方約七〇〇米位先に中央高く真四角に見える大岩石が黒ずんで見える。

通訳氏が言うには、高さ一八〇米位で幅約一〇〇米四方もあるというが、こんな岩山は世界にも他になかろうと思われる。

この岩山が欲望のために親子兄弟が血で血を洗う人間の情けない歴史を秘めているのである。

レストハウスから此の岩場迄歩きながら説明する名調子、博学？のコンダクター兼通訳氏の話しを聞いていると、仏説観量寿経のビンバサラ王と一子阿闍世太子との無惨な悲劇の話しとが、二重写しとなって脳裏に映じてゆく。

それは、五世紀のことであった。長男の力

シャバ王子は、恩愛深い父王の権力と、財宝に目が眩み、遂に秘かに倭臣と謀って父王を殺害して王位につき、財宝を恣にしていたが、是に憤激を覚えた弟達が、兄を殺そうと画策した。事を知ったカシャバ王子は身の危険を感じて、アヌラーダブラ城から、東南方一〇〇キロのシギリヤのロック（大岩石柱）に目をつけ、意中の家臣を引きつれて逃げ出し、その岩山を中心にして周辺を要塞化して弟達の襲撃に備えていたのであった。家来以外は寄せつけないこの岩山に、十八年もの長い間一日一日を生きて行くことと、襲撃に備えての心の休まらない日々であった。でもせめても of 愉めとなっていたのは城から伴って来た名画家に極めて官能的な極彩色の美人画を二十有余ヶ所描かせていたのを、王子以下多数の将兵は、この絵を眺めてはひからびた心に潤いを与えていたのではなかったらうか。

でも、十八ヶ年の身心ともの苦勞も甲斐なく、遂に弟達の剣に血ぬられ、若い非業の生

涯を閉じたのであった。カシャパ王子は罪の報いとして致し方ないが、極悪人の王子とは知りつつも、カシャパ王子と王城を抜け出した家臣等は、再び王城に帰りもせず、カシャパ王子と共同運命として諦め、長い年月苦難を共にして生きて悲業の宿命に消えて行つた。彼等の足跡を見ようと大岩石山に出かけた。

レストハウスを出て人も車も見当らない車道を一〇〇米南下すると、シギリヤロックに行く専用の道路が東の森の中に通じている。西側の畠は麦、じゃがいも畠で、畠がつきて森となるが、森の中は時おり訪れる観光者のために道路が整備されてある。道路には雑草も見えず、赤い煉瓦の粉末が散布されて筍の目が見える。あとで判ったことだが随分と史跡保存と観光の施設がしてあるが、貧乏なスリランカにも似ず一文の観光料を取らないのには驚いたり感心したりである。それに比して日本の観光地は、世界的見地からいうと極めてちやちなものだが、何処も彼処も観光

料をガボガボ取りたくるのは、外国人の印象を悪くしていることだろう。

煉瓦の赤粉末の道を踏みしめ雑木林を通り過ぎると広く開けた草原地帯でその奥に五、六米高さの畳々たる岩場が見えて来る。蓮弁の台上に立像の大仏がましますかの如く、その畳々たる岩場を土台にして、例の大岩柱——シギリヤのロックが天空に聳えている。

目前に屹立する一八〇米余の高さで一〇〇米四方の大岩柱は人々を圧倒する威風がある。重り合つた岩の所々には、死角を利用して兵士が登り降りに便のように足がかりが着けてあり、射撃、投槍の場と思われる工作が各所に施けてある。大岩石要塞の前衛線となっている。

私たちは、岩場の相間に造られた観光者用の石段を登って天空に屹立するロックの足許に行つた。

ロックの足許から岩膚に取りつけられた観光者用の半米幅の歩道を斜めに登って行く。

鉄のボルトで岩膚にしっかりと取りつけた板張りに、ごさのようなものが敷いてあり、岩膚の反対側即ち左側は欄干代りになっているマニラロープを、上部から垂してあるロープに結着してある。私たちは、左手に欄干代りのロープを握りしめつつ一步一步細心の注意で登って行く。誤って転んで左の手のロープを手離したら間違いなく冥土へゴールインである。

右側の直立の岩壁は冷たくノッペリと感ずる。一五〇〇年前、この岩壁をよじ登ったり、降りたりする通路のため打込んである腐蝕した鉄棒や鉄環、それに岩壁に足を踏込むための五センチ程度の溝が等間隔に多数残存している。

どの位爪先あがりに登ったかよく判らないが三〇米は登ったろうと思われるところで、上を仰ぐと岩が湾曲している部分が見える。その所にビル建築の鉄柱の足場のようなものが一米半四角に建てられて、その中に垂直

の螺旋形の階段がある。

エレベーターに乗るように階段に移らねばならない。乗り移ってから足を踏み外さないよう全神経を集中して四本の鉄柱を左右の手で交互に把みつつ螺旋形の階段を登って行く。四〇米も登ったろうか——足の弱い人、心臓の弱い人や、老人はとても駄目である——螺旋形階段の終点となっているところに三疊敷位の小店があつて人の良さそう老人一人がニコニコと私達を迎えてくれた。彼の前にはシギリヤのロックの絵葉書やら、英文の案内書がおいてあつた。先に言つたように入場料を取るでもなく、商売気で売るでもない。彼は私達に岩盤に書かれている美人画に手を触れないようにと注意したばかりである。

私も、他の人も一ようにウォーと呻きにも似た声歎の声を挙げた。

ドームのように湾曲した岩盤には、直接極彩色の美人画が描かれているではないか。二十三体描かれていたと、言われるが、明瞭に

残っているのは四体だけである。

せん細、豊満な半裸の極彩色美女である。

私は、一二〇〇年前のものといわれる奈良の高松古墳の壁画を思い出して比較していた。

このシギリヤのロックより三〇〇年後代で、然も密閉された墳墓の中であるのに、写真で見ると限る絵具の塗料が大部剥げ落ちていくようなうだ。然し、このシギリヤロックの壁画は五世紀頃、岩膚に直接描かれているが、こ

旅と自然

—五浦の旅より—

世界中の人々から、ねたみをもってみられ

の部分の岩場が湾曲しているの、上からの直接の雨水は避け得たとしても、約七〇米の高いところだから、横殴りの雨やら、しぶきはどこも免かれることは出来ない。岩膚に直接描かれた絵具の色が一千五百年の歴史を越えて今に鮮かであるのは、日本の絵画人の是非観賞と研究を促したいと思う。

美人画は張り切れるばかりの豊満な肉体を魅惑的にさらして、諸行無常、盛者必滅の理を語りかけているようだ。



賀^か幡^{ぱた}亮^{りょう}俊^{しゅん}

(京都・洛南九品寺住職)

るほどの経済大国になったせい、現代の日

本人の大半は旅行好きらしい。平均的日本人の年間旅行回数がどれ位になるのかデータを持たないが、巷^{ちまた}はシーズン・オフを知らない旅行者であふれている。旅がその人を楽しませるから、また出かける気にさせるのである。人々が観光地を訪れ文化財を共有する意識をたかめることは結構なことで、自然美を全身でうけとめ人間本来のこころをとりもどす旅は素晴らしい。私も人並みに旅行は好きなのであるが、これまでにしかけた旅は研究旅行がほとんどであるために、のんびり旅の経験はない。それでも私は満足している。まわり道をさけて、よりきめこまかな人生を送るために私は旅にでかけるのである。

思えばもう二十年も前になるだろうか。恩師春日井真也先生以下同行五名の小旅行に参加して五浦^{いづら}へ出かけたことがある。目的地は茨城大学五浦研究所であった。我が国が世界に誇る大人物岡倉天心が、晩年をすごしたという五浦の天心邸は今では茨城大学が管理し

ている。天心はつねに世界的視野にたって思索し、日本文化を世界に紹介した。彼自身もまた書画・彫刻・著述など文化のあらゆる分野に活躍し、日本美術院の創設に尽力するかわら、多くの俊才を世に出している。

研究所の門を入ると、左手に宝物の収蔵をかねた陳列館があり、右手の広い手入れのゆきとどいた庭をしばらく歩くと、海に面した前庭のある豪勢ではないが清楚な感じの、小ぢんまりした建物がある。これが天心の住居である。座敷は客間兼書斎であったように記憶している。超一流の人物にあやかりたいと思った私は、天心が日常使用していたという文机に向かって坐ってみる。下座にもどりお茶をいただきながら、私は以前から天心先生と御縁があつて、今日御招待にあづかったのだという錯覚をたのしんで、同行の友と笑つたものである。違い棚に飾られている天心夫人の写真が、山田五十鈴に似た面ざしの美しい理知的な感じであつたのが印象に残ってい

る。研究所の緒方先生から参考になるお話を伺ったあと、前庭に下りるとそこはもう明るい秋月に照らされていた。前方の岬の突端は断崖絶壁で、海にむかって八角堂が建っている。全くそのままが一幅の図であるようなお堂の荘厳さ。岩壁にあたっては返す波の音の凄じさがきこえるところまで近づいたとき、お堂のたたずまいに魅せられた少女趣味的感傷がきえた。波の音はベートーヴェン第九の曲の最初のところをかなでている。全身で岩肌につかる波の叫びは、小手先で弾く音楽をあざ笑うようだ。岬に立つと真下にみえる波のしぶきは私の眼前にまでとびあがる。白い波しぶきはみるまに真黒な海中にその白さをかくす。この波の男性的躍動のさまは、人間に力の限り生きよと教えているようだ。天心の愛弟子横山大観の大胆な筆法はここで修得されたものであろうか。太陽に輝やく怒濤は神秘的とは思わないが、緊張感をともなう夜の海は私を魅了する。大自然の躍動がちっ

ぽけな私の存在を否定するかのように、眼前の白浪に抱かれて黒い海中にひきこまれそうな私をみた。それは私自身が大自然の中へ没入したい願望の幻であらう。そのとき、同行の声がして宿へ向かう車がきたことを知ったのである。翌日は天心及び一門のお弟子方の関係資料が保管されている別館の陳列室を見学し、そのあと天心の墓を詣でることになった。勿体ないほど数多くの逸品を真近かに觀賞させて頂いた上に、特別まだ公表されていない天心の書簡まで拝見させて下さったのであった。近年になってその彫刻の一部は京都の美術館で公開されたことがあり、私は二度目の五浦訪問に次いで、三度目の觀賞を京都で果たしたことになる。私は天心の彫刻に声なき声をきき、右下りの美しい文字で書かれた風信に彼の愛を情熱をうけとめ、平櫛田中の彫刻からは右手にひいた矢の先に、左手の弓にははられていない弦をみた感銘は深い。天心の愛弟子の一人菱田春草の、ねり絹を透かし

てみるうれた柿の実がかかれた屏風に日本の秋がある。春草の「落葉」と題されるこの屏風は、春草が第三回文展に出陳したもので、天心は展覧会場ではじめてこの屏風を見て「情趣巧致固より場中第一近頃の名品と感じ申し候」と激賞している。この天才画家春草は三十八歳で夭折されたのであるが、この作品はその前の年の作品である。雪舟をしのぐとさえ評された春草の、落葉の画は今でもあざやかに私の脳裏にやきついている。天心の墓はまた素晴らしい。こんもりと大きく盛り上げられた土まんじゅうだけの、全く石を拒絶したお墓であった。肌のぬくもりをさえ感じさせる土まんじゅうの曲線は、心から人を愛することのできた彼のようにやさしい情緒がある。生前彼が望んだように、墓のそばに植えられた一本の松の木が、天心と寂靜の對話をつづけているようにみえる。天心は忠実に真実に生きること自らに荷し、上手に世渡りすることを嫌って不遇な日々も経験して

いるが、彼の人物を高く評価する政治家や上流社会の援助もえて、天心は世界の岡倉天心の名にふさわしい能力を発揮した。明治の文化を世界的水準に引上げ、世界の日本文化として定着させた天心の人柄は、彼自身の手になる天心像が如実に語っている。天心の強固な意志と自信が天心像の豪放な風格に表現されていて、その身体を包む風変りな衣服もまた天才文化人の風貌ふうぼうには似合っている。まことに一流の人物とは思議なものである。あの変わった衣服をすんなり着こなしているのだから。それにしても古今一流の人物に接することは人生最上のしあわせである。私は天心の雄大な理想と繊細せんさいな感性に脱帽し、安易な妥協を許さぬ厳しさに共鳴するのであった。

それから二、三年たった頃、再度五浦を許される機会を得た。今度は学生を加えた十名ばかりのグループである。私は最初の印象が鮮烈であったので、胸をわくわくさせながら五浦の人となる。この前の五浦見学は、座敷か

ら庭へ下りた頃には夕月が中天にかかり、秋の冴えた月光に足許を照らされながら八角堂の外観を賞で、夜の海のすさまじさを心に刻んだのであったが、今度は随分早く到着したので時間的にゆとりがあった。好天に恵まれた邸内を、私たちは自由に散策することを許されて、みんな庭の碑文を読み、江戸菊の大輪に感心しながら、最後にあの八角堂へとあゆむのであった。近江の浮御堂は近江八景の一つとして有名であるが、お堂のすぐそばへ近寄ってはどうもいただけない周辺の汚れ加減である。浮御堂は遠景こそ生命である。それにひきかえ八角堂は、遠景よし近づけば更に嬉しくなる建物である。天心が冥想したであろう堂内は、つめても十人とは坐れそうにない畳敷きの部屋である。この堂内で天心と対座したであろう弟子たちは、さぞ肩がこる思いをしたであろうと、私は自分の感覚で他人をおしはかって苦笑するのであった。貴族的で優雅な八角堂に上がることを許され

た。私はしばらくの王侯気分にひたりながら、ここに坐って思想をねり、作品の構図を思案する天心像を思いうかべていた。そしてまた私のような者でも日々こんな環境ですごせるなら、少しは高尚でおおらかな人間に変身できのではないか、と真顔で考えるのであった。環境がある程度品格育成に影響を与えることは事実である。グループ旅行に参加して、二度までも天心の生活にふれた実感としては、現実に見える風景からタイム・トンネルに入って時間を逆行し、私は天心と語らい四次元の世界に生きたということである。

月と自然をこよなく愛し大自然との融和に休息の時をすごした天心を偲ぶとき、私たちは人間が自然を守るといふ傲慢さを反省したい。私たちは自然を愛しているつもりで、実は自然の側から抱擁されていることに気づくのである。無条件に人のこころを安堵させてくれるものは大自然そのものであり、人のこころは大自然と融和するとき安心する。折角

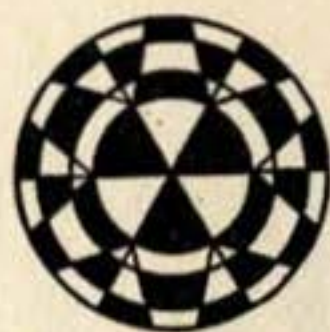
風光明媚な名勝地を旅行するのなら、ギッシリつまったスケジュールをこなさなければならぬ。団体旅行は、私の好みではない。天心が生きた大自然との融和は、現在が永遠のものであるという芸術観の立証であり、真の芸

桜便りの苦悩

「おまたせ サクラ前線 九州に上陸しました」(3月29日付朝日新聞夕刊より)

世相をありのままに再現する三面記事にあつて、たった一行の、回りと丸でちぐはぐなこの見出しこそが、何か心嬉しい救いの神の到来を告げるかの様であります。冬の酷寒の辛さは、この暖かい春を待つ心によって耐え

術鑑賞^{かんしやう}は、芸術から生きた影響を生み出す人達によってのみ可能である、とする天心の言葉は、遊山気分で自然美がわかるものではないと教えている。



松^{まつ}平^{だいら}実^{じつ}胤^{いん}

(真言宗・大山市寂光院貫主
京都智山専修学院講師)

られるのでしよう。桜便りが「ふくらむ・ちらほら・三分咲き……」と伝えられると、人は心浮き浮き、もう家の中にジツとしていられなくなるものです。

山寺の私の所にも、大勢のハイカーが楽しそうに大騒ぎをして登って来る様になりました。

「ヤッホー、ヤッホー……」余程の深山ならともかく、ドングリの背比べ程の小山には、こだまなんぞ返ってくる訳がありませんのに若者達の声は延々と続きます。

「もうすぐはーるですねえ……」別のグループでしようか、ポリュームを上げたラジオから歌謡曲が流れてきます。

恐らく雲雀や鶯は、それを聞いて呆然自失していることでしょう。最近あの美声があまり聞かれなくなりました。そういえば、以前には、野兎やリス達もヒョッコリ顔を出したのに、今ではサッパリ姿がみられません。ウツカリ顔を出そうものなら、追っかけられるのが関の山、それよりも、もっともって山奥の、人の気配のない木の株で、のんびりウトウトしているのでしょうか。楽しい春の到来が、逆に鳥や獣達を住みにくくしてしまっている様です。

同様に、私共同じ山の住人も、桜便りが聞かれると、ソロソロ溜息が漏れ、頭痛がして

きます。都会の人からみると、贅沢な悩みかもしれませんが、ついこの前の、厳しく寒い冬の、あの誰も訪ねて来ない、静かな山が懐しく思い出されます。

シーズン中の休日が好天であらうものなら大変です。大勢の登山者で騒々しいのはいうまでもありませんが、つわもの共の夢の跡が、何とも情無く、それを見て涙するのです。

所構わず、無造作に捨てられたゴミや空カ、その脇に立つ看板の何と無力なことでしょう。

「ゴミを捨てるあなた!! 誰がどうやって始末すると思いますか? 自然はみんなのものです。あなたにそれを汚す権利がありますか? 次に来るあなたの家族の為、友達の為、ゴミは捨てずに持ち帰りましょう。合掌」

また小さな草花が摘まれ、枝が折られているのを見て、ガッカリしながら、頂上に行く道すがら、それらが捨てられているのを、しばしば見かけます。厳しい寒さを耐えに耐え

てやっと世に出た小さな花の命が哀れです。美しいものを美しいと眺める時の満足感は、それを掌中にした時、もろくも崩れ去ります。枯れて醜くなるのに、さして時間はかかりません。美しい時だけ、ちやほやし、邪魔になると捨ててしまう現代人の心の有様を垣間見る思いです。

更には、木を抜いたり、野の石仏を持ち去る人まで現われる始末です。植林したての桜やもみじの苗木が一本残らず無くなったり、何気なく道端に立って、微笑返したくなる様な、ほのぼのとした石仏が、突然姿を消したりすることもあるのです。誰かが家へ持ち帰り、庭に置いて、満足しているのでしょうか。山の木々や野の石仏は、本来の場所にあつてこそ始めて、素朴な味わいがあり、その真価が発揮されるのでありましょう。

色んなことに出合う度毎に、この山の住人は、「休日は好天ではなく、雨天であつて欲しい。そうすれば、山の草花を始め、生きと

し生けるものの寿命が一日延びるのに」と心秘かにつぶやく程になりました。

我ながら、僧侶にあるまじき狭い見に驚きます。勿論いつも思うのです。「自然に恵まれぬ都会の人々を暖かく、にこやかに迎えて差し上げたい」と。しかし、様々な人々に出合いますと、ついつい目を三角にして、自然保護憲章を声高に説いて回っている自分にハツとするのです。

○

仏教には「一切衆生悉有仏性」という基本点があります。すべての生きとし生けるものに仏となる可能性を認め、その点に於ては人間も他の衆生と同様に平等であります。従つて人間のみが他の衆生を自由に出来得る筈はありません。

仏教では一切衆生は無始よりこのかた、無限の因縁所生によつてお互いが生かされて生きてきたと考えます。この考え方は、今年の

四月、京都で開かれた「第五回生命の起源国際会議」に於ける世界の著名な科学者の討議内容と違う所はなかったと思います。

一方、我が国には本来、山には山の神、海には海の神という様に、八百万の神信仰がございます。

この様に、日本人の精神史を支えてきた仏教や神道を考えてみますと、日本民族は常に自然と一つになって、色心不二の世界、お互いにつくしあう世界を理想としてきた筈であります。

しかしながら、我国が西欧の科学技術を取り入れて急速に近代化されるに従って、色の世界の発展が更に色偏重となり、我々の精神史は色心のバランスを失って、流れが変わってしまった様であります。しかし、それは我が国が、西欧化、近代化するに急で、西欧の科学万能主義を一面的に取り入れた処に問題がありそうです。

西欧の思想は人間中心主義といわれ、自然

界を従として、科学技術が進歩したといわれますが、だからといって、色偏重という訳ではないと思います。例えば、西欧の街並を歩いてみますと、西欧人は可能な限り自然を損わず、より豊かに自然を取り入れて暮している様な気がします。常に人間本位の生活をめざしながらも、それは従である自然界の恩恵を離れてはありえないという観点の上に立つて、伝統的に自然保護の意識が高い様に思われるのです。即ち、自然破壊は人間生活の根本を脅かすものであり、将来、我が子・我が孫の世代にも、豊かな自然と共存出来る様に、自然愛護については、親は子供を厳しく仕付けるのでしよう。まさにこれは、人間と自然との共存であり、仏教の理想とする色心不二の世界に近い様に思われてなりません。

しかるに我が国にはかつての輝かしい精神史にもかかわらず、近代化・西欧化に急なあまり、人間の生活は、自然の恩恵を離れてはありえないという点が看過されて、人間本位

に自然破壊が進行して、自然保護は空念仏に終始し、当然の帰結として、公害という自然の復讐を受けている現状であります。今こそ将来の長い先を考えた自然保護の意識を高めねば取返しがつかないことになるでしょう。「子は親の後姿を見て育つ」といわれます。将来を担う子供に、親は自ら率先して自然愛護の姿を実践してみせたいものです。

○

ソロソロ花と新緑の候を迎えます。この山の住人には憂うつな毎日が始まります。

「母さん、こんな枝ぶり素的ね。折って帰ろうかしら。」「そうね、こんなに沢山あることだし、一枝ぐらい、誰も見てないからね。」こんな会話をまた耳にせねばなりません。そんな人を見かければ、私はやはり目を三角にして走り寄って行くことでしょう。

来山者をニコニコ笑顔で迎えられる日が早く来るといいと思うものであります。

◇ “浄土句集” 欄投稿要項

五月に入りまして、初夏の陽差しもさわやかで、本誌俳友の皆様もお健やかに過ごしのことと思います。

さて、ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）を選者にお迎えして、正月号より開設された“浄土句集”のコーナーもなかなか好評のうちに続けられています。

どうか皆様も、お仲間などにお呼びかけいただいて振るってお投句下さいませ。

一、ハガキ一葉に二、三句ずつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛

利休と仏教・その「佗び」(二)

河^{こう}野^の喜^{よし}雄^お

(文芸評論家)



三、「佗び茶」の真精神

前に私は芭蕉論において、武田信玄の、

参禅、別に秘法なし。ただ生死の切なるを思ふのみ。

の一語を引用し、禅哲学の真精神が、実にそこに存し、各人が生涯ただ一度だけのその「生」を生き抜き、生き通すことにその眼目の存するを言い、芭蕉が「此道行人なし」で、その「死に至る病」であるところの俳諧

の道を、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

まで、行き切り、行き完せたことを述べた。

すでに触れたように、「佗び」は「極限」概念なのであるが、事物の「極限」は、通常、同時にまたその「本質」であるので、平安朝後期以降、この語は、「物のあはれ」「幽玄」などの語と相關的に、専ら事物の「本質」探究理念として使用せられたのであり、珠光もまたその意義においてこれを採用したのである。

この「佗び」理念によって、珠光の先づ創始したのは、

いわゆる「四疊半」の茶室であり、従来の大広間、書院の間の大幅な縮小であった。その縮小に伴ない、その座敷飾りが著しく簡素化せられるとともに、従来極わめて濃厚であったところの舶載性や異国趣味に代えて、その和様化が推進せられたのであった。

この茶道における「侘び」理念を一層推進したものは紹鷗であったが、利休においては、なお一層徹底せられて、真にそのイデーするところの「極限」にまで達した、と言ってよい。

四疊半の茶室は、さらに縮小せられて、三疊・二疊半・二疊・最後には一疊半となっているし、茶道具・座敷飾・懷石料理など、すべてが「極限」まで簡素化せられている。

一物モ持タズ、胸ノ覚悟一、作分一、手柄一、此ノ三箇条ノ調ヒタルヲ侘数奇ト云フ。(山上宗二記)

家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにてたる事也。

是仏の教、茶の湯の本意也。(中略)座敷の道具はよろづ事たらぬがよし。(「南方録」利休の語)

茶の湯とはただ湯をわかし茶を点てて、呑むばかりなり本を知るべし。(利休道歌)

慈鎮和尚御和歌ニ、ケガサジト思フ御法ノ供スレバ世ワタルハシトナルゾカナシキ、此歌ヲ宗易老常ニ口吟ニテ候。世上末ノ世ニ成テ、宗易ヲ始メ我人茶湯ヲ身過ニ仕事、口惜次第也。(山上宗二記「茶器名物集奥書」)

などの言葉や歌にほぼ明らかのように、茶道とは、「ただ湯を沸し茶を点てて呑む」ばかりの事と言い切り、その「茶道を身過ぎ(職業)」とする事さえ口惜しい」と考えていたのが、利休の「侘び茶」であった。

故に彼はその現実生活において、衣・食・住の極限において生活した。衣は利休茶・利休鼠の地味な綿服であり、食は一汁一菜、またはお茶漬であり、その居常の住居は、四疊半以下の茶室、山里丸であった。

そして、その現実生活において、然く「極限」をイデオロしつつ、見事にそれを実践したように、彼はその精神生活においても、「利休宗易」という個人を生き抜き、生き切った。

その「茶湯ヲ身過ニ仕事、口惜次第」の一語にも、ほぼそれを推することが出来るが、そのピークを示すものこそ、他ならぬ彼の切腹である。

上述のように天正十九年、当年満七十歳であった利休

は、秀吉から、堺における自宅への蟄居を命ぜられたが、その理由は、彼自身が寄進したところの大徳寺山門楼上への、自身の木像安置と、茶道具の目利き、仲介等に関する私曲（謝礼等の収受）とであった。

「天下第一茶湯者」であり、大閤秀吉の茶頭として、その側近第一であって、「内々の儀は宗易」「宗易ならではの関白様へ一言も申上ぐる人これ無しと見及び候」（大友宗麟家老宛書翰）とまで言われた利休であってみれば、恰度、彼のライバルとして漸次彼に代りつつあった石田三成が、清正・正則らの憎悪・憤激を買ったように、利休に対する嫉視・反感にも相当強烈なものがあり、秀吉への密訴・誣告も、恐らく尋常ならざるものがあつたであらう。

そして秀吉は、始めはそれを聞流していたであらうが、その密訴、誣告は愈々多きを加うるに反して、利休には一向これに対する反省・自己批判の態度が見えず、その「天下第一者」たる秀吉に対する態度にも恭順・謙虚と言ったところは聊さかも窺かわれなかったため、その利休に対して、共に「天下第一者」としてのライバル意識をも感じていた秀吉は、「ここらで一寸お疹を据えとい

てやれ」位の意味で、一応、蟄居・閉門を下命したのであつたらう。

そして、これによって利休が自身の従来の態度を反省するとともに、宥恕・救解の手を打って来ることを期待し、その際は、「以後注意せよ」の一語位で宥免する心算でいたのであらう。そして彼はその内意をおそらく前田利家に伝えていたものの如く、利家から利休に対して、御内証にて、大政所様・北政所様を頼み奉り、御詫言申し上げ候はば、御免成さるべし。と勧告して来ているのである。

然るにこれに対して利休は、断乎拒否し、天下に名を顯し候我等が、命おしきとて御女中方を頼み候ては無念に候。たとひ御誅伐に逢ひ候とても、是非なく候。

と返書しているのであって、この利休の態度には、明らかにその「生死の切なるを思ふ」ところの、「詫び」精神が如実に示されている、と私は考える。

そして、この利休の態度に激怒した秀吉は、直ちにその木像を磔刑に処するとともに、切腹を下命したのであるが、この両天下第一者の、言わばライバル合戦は、一応、

秀吉の勝利に終ったものの如く見えるけれども、私はこれを利休の實質上の勝利と考える。

その「生死の切なるを思い」つつ、その個人の一生を生き抜き、生き切ったところの佗び精神の徹底振りにおいて、秀吉は到底、利休の敵ではないからである。

「佗び茶」の真精神が、実に利休の切腹自体に如実に象徴されていることを、私は茲に声を大にして、読者に訴えたい、と思う。

(了)

|| 新刊 ||

河野喜雄 著

『芭蕉美学の系譜』

——隠遁詩人・本質探究の道統——

(発売元)

〒170 東京都豊島区北大塚三―二九―二

教育出版センター

(こ)(は)(な)(し)

死ぬときには南無阿弥陀仏

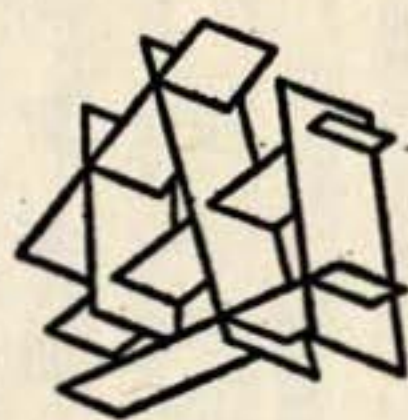
当宗の檀那、帰依する寺の普請あるに、行きて小壁下地をかきけるが、あやまちに縄きれ、高き所より落ちさまに、「南無阿弥陀仏」と叫ぶ。(角川文庫本『醒睡笑』下巻、七〇ページ)

法華宗の寺の普請にかり出された檀家の男が、長押の上から天井の回しぶちまでの壁の下地ごしらえで、竹や葦などを編んでいたところ、あやまって綱が切れて高所から落ちてしまった。その落ち際に、思わず「南無阿弥陀仏」と叫んだ。これを、聞きつけた同行は助け起こしながら、かりそめにも法華宗の者であるからには題目を唱えるはずなのに、どうして念仏などを申したのだ、と詰問したのだが、男は、「さればよ、さきの落ちさまには、ていど死ぬると思うてあったは」と答えたという。——先程の落ち具合では、てっきり死ぬかと思った、というのである。

『醒睡笑』巻之七の「思いの色を外にいふ」という章からの一話であるが、世の中にはとかく心の中で思っていることをうっかり口に出してしまうことは多い。この逸話は、当時の庶民への念仏の深い浸透模様をしのばせる。(H)

法然上人の弟子たち ①

宇都宮一族のこと [一]



梶^{かじ}村^{むら}昇^{のぼる}

(亜細亜大学教授)

(一) 宇都宮頼綱のこと

(1)

宇都宮頼綱が、法然上人の信者となった経緯を、『四十八卷伝』(卷二十六)は、次のように書いている。

あるとき、頼綱が、家子郎党をひきつれて武蔵野の原を歩いたところ、たまたま、通すりがりの熊谷次郎

直実に行きあった。直実は、頼綱にこう言った。「ずいぶん大勢つれて歩いているなあ。しかし、いくら大勢いても、無常という利鬼だけは防げないぞ。それよりも、阿弥陀如来にすべてをまかせるがよい。阿弥陀如来の本願は、念仏するものをすべて、悪道におとさず、極楽へ迎えとると誓われている。一騎当千のつわものがどれだけいようと、念仏にまさるものはない。頼綱殿、心がけ

て念仏を申すようになさったがよい」と。頼綱は、直実のことばが肝にしみ、のちに大番勤仕のため上洛した承元二年（一二〇八）十一月八日、法然上人を摂津の勝尾寺かつおでらに訪ね、往生の道をただし、専修念仏の行者になった、というのである。頼綱はこのとき三十八歳のはずである。

承元二年という年は、流罪中の法然上人が許されて摂津の勝尾寺へ足をとどめられていたときである。すでに上人は七十六歳になっておられたから、頼綱は、上人の最晩年の弟子の一人であったといえる。『吾妻鏡』をみると、この年の九月十四日未の刻に、熊谷直実は、みずから死期を予言したとおり、東山山麓において、端座合掌、高声念仏を唱え往生したとある。このことは、当時の人々の耳目を驚かせたことらしく、『吾妻鏡』は、この年の九月三日の条に、直実の子熊谷小次郎直家が、父の予言した死期に会うべく上洛したと記しており、それに続けて、直家が上洛した後、このことを幕府の中で披露したところ、大江広元が「兼ねてから死期を知るとい

うことは、普通の者にはできないことなので、疑わしいことだが、熊谷入道は、この世を遁れた後、浄土を求め、念仏の修行を積み重ねていたものであるから、信じられることである」と述べたと記している。そして、翌月の十月二十一日の条に、東平太重胤が京都から帰り、予言通り直実は、少しも病気でなかったのに、九月十四日に往生した、という報告の記事を載せている。「結縁道俗が東山の草庵を囲繞した」と書いてあるから、相当に騒がれたことであつたのであろう。

そして、十一月八日、頼綱が法然上人の許を訪ねたのであるから、頼綱入信の直接の切っ掛けは、直実往生の事件ではなかったかと思われる。もちろん、武蔵野の原での直実の言葉もその一因であつたろうと思われるが、頼綱には、まだまだ娑婆っ気がありすぎて、そのときには、そこまでふんぎりはつかなかったのであろう。直実が愚直なまでに一本気であるのに対し、頼綱にはみずからの心の屈折が処理できなかったものがあつたと思われる。

頼綱は、折角法然上人の許を訪ねたのではあるが、その教えを直接受ける機会はずかしかなかったのではなからうか。第一、勝尾寺は、今の大阪府箕面市にあるので、京都の大番勤仕として勤めていた頼綱は、そうたび

たび訪ねることはできなかったであらうし、上人自身もこのころすでに、耳も聞こえず、目も不自由であったと『九卷伝』や『伝法絵』に書いてあるので、老衰の徴があつたものと考えなくてはなるまい。上人が京都へ帰つてもよいという許可の宣下をもらったのは、建暦元年（一二二一）の十一月十七日であり、すぐに帰洛したとしても、二カ月後には、上人は入滅してしまふわけであるから、結局、頼綱は、上人の弟子であることまる三年、その間、多くて数度、上人直接の教化を受けたということになる。信仰の深さなどというものは、何も教化を受けた期間の長短によるものではないから、このことをもって、頼綱の信仰をうんぬんすることもないのであるが、頼綱の場合は、せめて法然上人のもっとも活躍された時期に、数年間でもその教えを受けてもらいたかつた

という気がしてならない。

それというのも、頼綱は、上人の入滅後に、上人の門弟であつた証空の門に入り、出家して実信房蓮生と号し、京の西郊嵯峨に住むことになるのであるが、証空と頼綱という取りあわせが、私には気になるのである。

証空（一一七七一—一二四七）という人は、今日でも活動している浄土宗西山派の開祖となつた人である。家柄がよく、源親房の長男として生まれ、九歳のとき、内大臣久我通親の養子となつてゐる。通親といへば、道元禪師（一二〇〇—一二五三）は、この通親を父にした庶出であるから、証空と道元とは戸籍上の兄弟ということになる。道元は、のちに、念仏を皮肉つて「春の田の蛙が昼夜分ちなく鳴いているようなものだ」と非難しているが、考えてみれば、自分の兄は、法然上人の門下とはいへ、念仏宗の大立物なのであるから、世の中はおかしなものだと思ふ。それはともかくとして、証空は、十四歳のとき、法然上人の門に入り、二十三歳のときには、上人のもとにあつて、『選択集』撰述のための勘文の役をつとめて

いる。勘文の役とは、經典の引用等について意見を述べたり、点検をしたりする役である。そして二十五歳のときには、九条兼実邸へ行って『選択集』の講義をしている。これだけみても、彼は生来学者的な人であつたと思われる。それだけに著作も多いが、教学的、理論的なものが大部分である。恐らく彼は、法然上人の信仰思想というものを、従来の仏教教学の型に鑄込んでいこうと思つたのではないだろうか。何しろ六百年も続いてきた仏教教団を向うにまわして、その中で、新しく浄土宗の教団を確立しようと思えば、（事実、彼はそれが残された自分の仕事であると思つていたようである）ただ既成教団に対立ばかりしては、できない相談である。そこには何らかの妥協も必要になつてくる。彼は、上人の滅後、京都に踏みとどまつて、それを実行したのである。たとえば、教学の面でいえば、法然上人が、念仏以外のすべての諸行を捨てられたのに対し、証空は、もし安心を領解したあとであるならば、諸行も往生の因となるというような説き方をしている。これは既成教団の主張している諸行

説に対する妥協といわなくてはなるまい。そこで、たとえば既成教団の中の最たるものである比叡山延暦寺の学僧たちは、「師の法然は諸行の頸を切つたが、弟子の証空は諸行を生けどりにした」と噂しあつたということである。

教学の面だけではなく、その行動においても、彼は既成教団と妥協していった。たとえば、法然上人が土佐に配流になつた承元じやうげんの法難（一二〇七）のときも、彼は佐渡に流されることになつていたが、どういうわけか、「無動寺之善題大僧正これを申あづかる」（『歎異抄』）ということと配流を免れている。無動寺とは、叡山東塔の別所であり、善題大僧上というのは、前大僧正の誤りで、慈円のことである。法然に批判的であつた『愚管抄』の著者が何のために証空を助けたのかはわからないが、そういえば、証空の養子先の父久我通親の側室は、慈円の兄である松殿基房のむすめである。（この側室が道元の母と推定されている八犬久保道舟『道元禅師伝の研究』V）。しかし、そのようなことをいえば、慈円の兄の九条兼実は、

法然上人の信者であり、法然の流罪を歎き悲しんで病氣にまでなつたくらい法然を心の師と仰いでいた人である。しかし、法然は承元の法難の中心人物であつたから、それはいたし方ないことであらう。

法然入滅後五年目に起つた嘉禄の法難（一二二七）にも、証空は専修念仏の張本人と目されて、山門の衆徒から指名されたほどであつたが、念仏者でないことを極力弁明して、ついに難を免れている。

このように見ると、証空は、まったく無節操な人のように思われるが、そうやってしまふのは酷であつて、やはり、既成教団の依然として根強い京都にあつて、吹けば飛ぶような浄土教団を何とかして守つていかななくてはならないと思つていた証空の立場というものも考えてやらなくてはなるまい。事実、彼は、嘉禄の法難で、法然門下の主な人々が追放されあき家同然となつた京都の念仏衆団をひそかにまとめて、念仏の教学拡大につとめてきたのである。宗教界では、政治的に動く人々がよく非難されるけれども、たしかに信仰一途の人からみれば、

その非難も当らないではないが、そういう人々の悲しみも思いやってみなければならぬのではなからうか。案外、宗教界は、非難された人々が作つた社会的基盤の上に乗つて、自分は信仰一筋のような顔をしている人々が多い。泥をかぶつた人々の悲しさの上に生きていられることを思わなくてはなるまい。これはあまりにも妥協的な弁護になつたかも知れないが。

それはともかくとして、証空という人は、良くも悪くも、こういう人であつたと思うわけである。要するに、愚直なまでの念仏者ということではなく、理知的な利巧な人であつたと思われる。

頼綱が、この証空の門に入つたということは、折角の頼綱の精神が生かされることなく、何か普遍、一般化されてしまつたのではないか、要するに、並の精神になつてしまつたのではないか、という気がしてならないのである。

（つづく）

浄土句集

一田牛畝選

鎌倉の引く波音や実朝忌

東京 鳥居 千代

節分の鬼と握手の子供達

福岡 前田 秀峰

島原の武家屋根跡の梅白し

福岡 国友 星畝

寒明けの土黒々と朝の雨

東京 阪入 等達

評 病人には寒さが一番苦になるらしい。

東京 阪入志津枝

天平の首なし仏堂籠

福岡 原 敬二郎

春を待っているのは病む人ばかりではないが、長が病みの夫に春となったことを語っているのである。きつと子にはきびしく、夫には優しい人にちがいない。

東京 鈴木 葉子

寒椿落ちたる後の夜の静か

埼玉 佐藤 泰子

若布売女の言葉で何処の海女か分るが国訛がなつかしいとは同郷の人らしい。

山形 松田 允子

木蓮の蕾ひしめく寺苑かな

福岡 高良 慈風

竹折れし音の鋭く雪の嵯峨

京都 安藤 寛

大屋根も見えず一と日の春一番

福岡 増谷 雄鳳

東京 真野よし子

晨朝の木魚の響春隣

古雛の男のまなこき細きかな

大分 丹羽 難中

泊夫藍のはの紫に日のやわら

東京 栗原やえ子

初雷に独り居の夜のおそろしく

東京 星野 小登

更衣して巡教の身軽ろさよ

一田 牛畝

■ 読者の声 ■

旅 と 信 仰



きち せい むら なか
吉 清 村 中

私達夫婦が結婚してから今年は四十三年目になる。その間に男四人、女三人の子宝に恵まれ、孫も十七人と増え、中村一族も現在三十二人となった。その永い年月の間に家族全員が怪我もなく、病氣らしい病氣にもかからないで今日迄無事に過してこられた。

このことは、夫婦の健康はもとより、健全な精神力と神仏を敬う信仰心の加護によるものと深く信じている。

最も、私は学者でも宗教家でもないので専門的な学説や用語は良く判らないが。ただ、六十八年間忍柔を心の基盤として判断力と鑑察力を通して体験と実行によって人生の真理を体得してきたものである。

これから、私説により、病氣と怪我の起因を少しお話しして見たいとおもう。

先祖の因縁による病氣を先天性、両親を含めた自分の因縁による病氣を後天性と呼びたい。その、因縁の根本になるもの挙げて見る。

我慾、無慈悲、無信仰、我侷、短氣、暴飲、食物の粗末と好嫌、人生の逆行、対人の想い。以上のことから、先天性、後天性共に、「何日」、「誰れが」、「何んの」病氣や怪我に遭遇するかは因縁の浅深と軽重に度合も必然と異なってくるものと想う。

次に、旅と信仰について話しをして見たい。人心皆諸法の異なるは、之亦止むなき所存なり、然るに、仏道を成ぜんことによつて、その功德は普く一切に及ぼす、とある。

自分の信念に基いた祈念を身につけ、習慣的に自己陶醉出来ることが信仰だと信じていれば良いと想う。

例えば、穢いお話して恐れ入りますが、用便を足すときに、合掌した手を鼻と口の上辺に持っていき、両肘を両膝の角に当て、押しつけるような格好で用を足す。

そのとき、念仏を三回唱えると快適な気分が足すことが出来る。

用便は新陳代謝の本能であるから、良き体調の維持を祈念によって確保出来ると信じることも信仰の心ともい



巡礼姿の中村さん夫妻と

後方は聖観世音菩薩像—中村さん宅にて

える。

私達夫婦が、四国八十八ヶ所、西国三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所の各霊場を巡拝したときも、南無大師遍照金剛、南無観世音菩薩と祈念することによって、暗雲も立ち所に退散するという、靈驗灼かなり。ただ、信仰さえしていれば誰れにでもそのような功德が生じるという訳ではない。

それは、普段の日常生活に於いて諸行と信仰の係り合いが肝心で精進の心掛けが、み仏の加護を呼べる、呼べないの相違があると思う。従って、信仰心が深ければ深い程、不思議な現象が起きるが、いずれも与えられる仏の徳と考えられる。

いままで、夫婦が旅に出るときは、乗り物、旅館も一切予約したことがない。それに、特急、寝台、座席指定、新幹線などは全く利用したことがない。

普通か急行の夜行で乗り継ぎで目的地迄行く。旅館も中心地よりなるべく離れた処で、古くて宿泊客の少ない家をその都度探して泊る。

このように今迄、旅と信仰で各地の社寺を参拝したのであるが、団体で参拝したのは秩父だけである。

Ⅱ新刊紹介Ⅱ

法然と浄土宗教団 Ⅷ歴史新書Ⅱ171Ⅴ

大橋 俊雄 著

一言でいえば本書は、鎌倉時代に出現した浄土教の開祖法然房源空とその教えと信仰の歴史を明治以降の近代・現代まで辿った「浄土宗史」である。ことに、法然の生涯の歩みの中で、その専修念仏の理念と実践を要領よく紹介し、以下その後八〇〇年の浄土宗教団史を巧みに概観した手際の上さは見事である。

思えば昭和四十九年に、わが浄土宗では法然上人の浄土門の立教開宗八〇〇年の慶辰を迎えて、慶讃法要や諸種の記念行事が営まれ、その中で法然上人や浄土教関係の出版物も多く公刊されたことは、もとよりいまだに記憶に新しいことである。そして実際にもすぐれた成果がもたらされたわけであるが、しかし本書のように法然浄土教の教団史、宗団史という視点から、浄土宗八〇〇年の歴史を体系的に取り上げたもの

は少なかったようである。本書は新書判という限られた紙幅の体裁でまとめられた一書ではあるが、「教団の史的研究は歴史の変遷にのみ終始すべきではなく、地理的、社会経済的分野もないがしろにしてはならない」というような著者の学問的誠実さを含めて、むしろ適宜にコンパクトにまとめられた浄土宗教団の簡潔な通史といえそうである。

目次に従って内容を紹介してみると、本書は、「1法然とその教団」、「2浄土宗教団の成立」、「3教団の伸張と統一」、「4近世教団確立への歩み」、「5近世教団の動向」、「6近代浄土宗の展開」という、大きく六節に分かたれて構成されている。第一節は、法然上人の生きられた時代背景を踏まえて、その専修念仏の選択と実践活動の生涯を詳説し、第二節はその門弟たちの活

動、ことに二祖聖光と三祖良忠の描写を通して鎮西教団の成立を説明している。第三節は、良忠門下の動向を追いながら聖罔と聖聰によって組織化された浄土宗教団を素描し、さらに第四節では、近世への教団展開の過渡期の模様を、一条・名越・藤田三派あるいは白旗派の動きを尋ねながら、次の第五節の江戸時代の増上寺の興隆と檀林仏教、また捨世派や興律派の展開へとつないでいる。なお、第六節は明治以降の浄土宗団の歴史を簡略に跡づけている。

総じて本書は、可能な限りの資料の裏付けを得て、図表や写真などを随所にさしはさみながら、浄土宗の教団史を明解に整理されたものといえよう。廉価な新書本でもあるので、多くの人が読まれることを望みたい。

(発売元)

〒102 東京都千代田区富士見二―十一―十
丸十ビル

株式会社 教育社

(〇三)二六四―五四七七(代)

念佛ひじり三國志

(四十九)



——法然とぬぐも人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

比叡山上、西塔界限から法城の雰囲気が絶えて久しい。そこはさながら武衛の府であった。武装した僧兵が往きかい、山道の各所に検問所が設けられ、登山してきた僧俗を狼藉にチェックしている。

しかし、この建久八年の時点、僧兵たちの眼つきから精気が薄れていることも、またかくし難い。彼らはいちように倦んでいた。源平争乱時の緊迫感がなかった。そ

れは鎌倉で武家政権が確立し、海内を制覇した事実に由来している。朝威が減退して、積年にわたってこれをおびやかした続けた比叡山自体の蛮性エネルギーが薄められてしまったためでもある。

理由、もう一つある。

僧兵——衆徒と呼ばれたこの荒法師たちは、ほんらいが登山してきた貴族の子供に随侍した従者だったのだ。主人である「学生」が修法究学の期間、彼ら従者たちは山上に住みつき、いつか独自の暴力集団に肥大化してし

＜比叡山の僧兵＞



前号のあらすじ

仏像を焼き払いながら説法する空阿弥陀仏こと馬粥。この情景を目撃した熊谷入道と明遍。熊谷入道はゆき過ぎとも思える説法の主が法然上人の教えに依拠していることを知る。二人は対峙し、ことの決断を法然上人に仰ぐことになった。明遍も同行を求められたが、久我通親の来訪を知らされ、辞して観音寺境内の光堂へと急いだ。

来客は久我通親だけでなく、高野山の蓮華谷で明遍について出家した弟子の了智房こと佐々木高綱と一緒にあった。高綱の来意は、今は名目上四天王寺の所領となっているが、兄定綱の横暴な処置によってうばわれ一条能保に割譲された旧領の復権を四天王寺に口ききしてもらうことである。仲立ちの労を取った久我通親のねらいは、一条能保の追い落としにあった。通親は明遍と高階栄子との関係を知っているようであった。

まった。

衆徒勢力の後退は、新規補充が途切れがちになった事実も物語っている。貴族は疲弊し、子弟の「学生」に従者を送りこめなくなったのもあった。

西塔の衆徒たちも老年者が多く、習慣的にこの山上を支配していた。

「どこへゆくか」

数人の衆徒がにぶい動作で寄ってくると、その修行僧

を取りかこんだ。検問、というよりも通行許可の賄路を期待する卑しい眼つきだ。

「南谷の鐘下坊へおりる」

修行僧はうるさげに答えた。

賄路は期待できそうにない。黒衣をまとっただけで、荷を背負わせた侍者もともなっていない。それと、頭髪が異風だ。かき乱したままの蓬髪である。山伏風俗でもない。

「鐘下坊へ何をしにゆく」

「これを見たら判るだろう。問法だ」

「誰のところへだ」

「幸西大徳」

衆徒たちの表情がなごんだ。成覚房幸西の名はそれほど響きわたっていて、衆徒間で人気があるらしい。

「おぬしは？」

「行空。以前に同じ南谷の法本坊にいた」

「妙な頭だな。都で何をしていた」

頭目らしいのが、蓬髪を不思議そうに眺めている。

「沙弥だ。町住まいの沙弥だ」

「ひじりか。念仏か」

「きまっている」

行空は黒衣を誇示した。専修念仏を象徴する衣裳だった。

衆徒は仲間をかえりみて、うなづきを交わし合った。

何か共通の関心事があるらしい。

「念仏ひじりは豪勢な暮しをしているそうだな」

「豪勢な暮し……」

「沢山の信者を集めて、施物にも事欠かぬと言うではないか」

今をときめく念仏ひじりの噂は誇張されて山上に伝えられていた。

羨望の眼で行空の黒衣を砥めまわす。高価な織りであった。

「施物に、女もあるのか」

衆徒は本音を露出した。

「女か……そんなものは、よりどりみどりだ」

「どう、よりどりなんだ」

「念仏の奥義は秘密口伝だからな」

「秘密口伝……」

「ひじりと二人きりで密室へはいる。奥義の称念は口づ

てだ。相手が女人の場合でもだ。二人きりの口伝だぞ」
行空の口調が煽情的になる。

「口を触れ合うのか」

「そうすることもある。女人は念仏の法悦で正体もなく
なる」

「何でも出来るわけだ」

悩ましげな太息が洩れる。密室の図を想いえがいてい
る。

別の悪僧が身を乗り出してきた。

「口伝が出来るひじりには、何か資格のようなものが必
要なのか」

「資格？ 簡単なことだ。弟子を五人以上つれて入門す
れば、じきに口伝の伝戒師になれる」

そんな規約を誰がこしらえたのか。また伝戒師なぞと
いう呼称すら都では聞いていないはずである。

「弟子を五人以上か」

衆徒たちは顔を見合せた。此処にいる仲間だけでは駄
目なのだ。新たに五人の弟子を探がして来なければなら
ない。

頭脳の回転が素速い第三の悪僧が、

「幸西大徳は念仏ひじりになるのか」
と、念を押した。

「そうだ。下山されて大頭目になる」

「専修の大頭目にか」

その話を言いふらしただけでも同調者の五人ぐらひは
容易に集められる、とその悪僧は計算したようだ。

信仰なぞ微塵もない。無頼に楽しく世渡りをしたいだ
けである。山上の僧兵暮しはすでに飽いた。

幸西大徳が念仏ひじりに転進する。この情報を掴んだ
だけでも立場は有利だった。

山上では情報が涸渇していた。それも倦怠した現状を
打開してくれる新情報だ。幸西大徳の念仏ひじり転進を
伝えたら都へ下山する衆徒はふえるはずだ。

「幸西大徳はそんなに人気があるのか」

行空が問いただす番だった。

「座主以上だな。学徳兼備、それと何よりも修法ぶりが
すさまじい」

「以前は学問専一の人だったが」

「いやいや。幸西大徳の断食行は山のどの僧も真似られ
るものではない。連続十日間、それもうち三日は食物は

おろか一滴の水も口にされないのだ」

いつの時代でも難行苦行は大衆の尊敬を集めるものだ。理念をこえて、身を以て信仰の証かしを示すからであらう。

行空はあらためて今日、幸西を訪ねてきた行動の効力を確信した。

「おぬしらもまごまごしていないで、早く幸西大徳のことを伝えて、仲間をかき集めて下山することだな」

「都へおりたら何処へいったらいいのか」

「七条河原にある行空の草庵を訪ねて来い」

「河原の草庵か」

衆徒たちは意外感で当惑する。新しき時代をになう専修念仏の本拠が河原の草庵にあるのか。

衆徒たちの輪を抜けて、法本房行空は歩き馴れた道を南谷へと降りてゆく。

すでに晩秋であった。きびしい比叡山の冬が、踏んでゆく落葉から泌みるように予感される。

二

方里十数里の円形にひろがる比叡山は三つの塔で分断

される。

東塔、西塔、横川。

地域上の区分だけではない。長い歳月が、それぞれに独自の教学と宗風を植えつけた。すでにお互いが同心も連帯感も抱き合わぬ自己主張の拠点に固型化してしまつたのである。

比叡山の宗教機能が無知無頼な衆徒僧兵に掌握された直接原因としてこの頭脳の分裂硬化をあげなければならまい。大衆とじかにかかわり合うべき仏法が、山上では教学の枝葉末節を論じ合う羅漢像に変形されたのである。比叡山流の表現をかりれば「論湿寒貧」である。スツカンピンの語源となった揶揄言葉である。

三塔の対立は、さらにこれを取り巻く谷々、十六谷と称せられた末端の分裂硬化によって、いっそう複雑化し復元不能におち入った。

法然が承安五年、この山を見限った動機もまさにこの「論湿寒貧」からの脱出にあったと言える。

そんな現状には眼をふさぐとして、この建久八年、俊秀な学僧や真摯な修法僧がひしめいたのは此処西塔の南谷であった。

比叡山きつての天台学匠、宝地房証真を軸に、宗源、
敵俊の高足がその左右に控えていた。だが師の証真がそ
れ以上の期待を寄せたのは若き二人の学弟であった。成
覚房幸西、それと筑後から遊学してきた聖光房弁長であ
る。

幸西の才気と情熱、弁長の篤信と好学ぶりを、師の証
真は甲乙のへだたりなく評価した。この両輪は近い将来
において西塔慧心流の支軸となることはもちろん、叡山
全体の天台学風を昂揚させる活源と信じて疑わなかった
のである。

法本房行空は、いま幸西と彼の居住である不動堂の一
隅で対座している。

「何年ぶりになるかな」

幸西は、旧知を迎え入れたときから変らぬ無表情であ
る。対座、と言っても幸西は経台の聖經から視線を離さ
ない。書見のままであった。

「三年、いや四年になるかな」

「相変わらず念仏ひとすじか」

「うむ。しかしこの前、ご房が語った一念往生義。あれ
は正しい。各所で受け売りをしたが同調者が次々に現れ

た。いまではわしがその一念義の頭目みたいになってい
る」

「法然のご房は？」

やっと経台から眼を離し、行空をまともに凝視した。

「原則では領解を得ている」

「原則では、か。どこが不備なのか」

おのれが組み上げた一念義の理論だった。無責任な批
判は、法然といえども許さぬぞ、と言いたげに氣迫をこ
める。

「法然ご房はこう言った。念仏を詮じ詰めてゆけば終極
には一念と一念になる。阿弥陀仏が発する救済慈悲の
一念、念仏者がそれを渴仰する一念とだ。ただ……」

「ただ？ 何だ」

恐ろしい眼で幸西はにらみつけてきた。

「ただ、救う救われるというこの関係において、あくま
でも仏と人間との距離を、正しく保っておかねばなら
ぬ、と言われる」

「……」

「かりそめにも念仏者が仏と対等の立場にあると思ひ上
がってはならぬ。それは、すでに自力行だ、と言う」

「当然のことだ」

幸西の面上に安堵が流れた。法然の「注」の正しさを、彼も受容できるのである。

幸西は言葉を継いだ。

「わしが考える一念義も、弥陀の仏智がすべての前提であって、われら凡愚にも仏性がそなわるにせよ、あくまでもその仏智におすがりするのだ。救おうとする仏、救われたいと願う人間、この関係で情念は濃密になる。愛情が生じてくる。しかし、それに惑溺してしまえば、とんだ自堕落におち入る。行空、おぬし、大丈夫か」

矛先を眼前のひじりに突きつけてきた。

「何が大丈夫……」

「よもや、おぬしの一念義はその自堕落ではあるまいな」

真摯に念仏の本質を追究する成覚房幸西であった。

法本房行空は、すぐ手近にあった場面を想いかえして狼狽する。

さる貴人の女房であった。しげしげと七条河原の行空草庵へ通ってくる。熱心に一念義を説き聴かせているうちに、いつか行空自身が救済の阿弥陀仏になってしまっ

た。女房の身体を抱きしめて、愛慾の念仏をささやいたのは、つい先日 of 出来ごとであった。

だが行空は、狼狽する自分を別の関心事へ置き換えることで取りつくろおうとする。

「近ごろの都は、まさしく上下こそって念仏一色だ」

「そうらしいな」

「おそらくこの国がはじまって以来、仏法がこれほど民衆と密着したことはない。ただ惜しいことに、ここまでひろがった念仏が各人ばらばらだ。ひじりたちは勝手に信者を集め、めいめいが勝手なやり方で法を説いている」

「どんなやり方があるのか」

「安楽房や住蓮らは善導和尚の六時礼讃をすすめ、念仏の遊芸化をはかる。蓮華谷のひじりたちは大仏聖人を頂点にして勧進や造寺造塔のための念仏だ。念仏する数の多さだけを誇るやからもいる」

「しかし、東山に法然ご房が健在である限り、念仏の正しい進路はゆがめられまい」

「それが健在ではないのだ」

「健在ではないと」

「近ごろおこりの病いで、めっきり弱められた。東山の

＜七条河原の行空の草庵＞



禅室から殆んど他出せず、説法も弟子まかせだ」

「法然のご房は幾歳になられた？」

「もう六十四、五歳かな。余命は幾ばくもない」

「そんなに弱られたのか」

「今にして念仏門を統一しておかぬと、法然ご房が寂するとともに専修念仏は滅んでしまうであろう」

「統一するとは？」

「新しき宗旨、教団を正式に樹立する以外にない。法然ご房を盟主、宗祖に戴き、あの延暦時に最澄や空海がひらかれたように専修念仏宗を開宗することだ」

行空の口調に、粘っこい情炎が立ちのぼってくる。今日の登山目的がその核芯に迫ってきたからである。

逆に幸西は黙りこんだ。新宗の開宗とは、ことが余りにも重大過ぎる。第一、現在の自分とそれがどんな関係を持つのであろうか。

「ご房、おぬしは未だ東山へいったことがないな」

「法然ご房と会う機会に未だ恵まれぬ」

「是非、一度出かけて欲しい」

「なぜ？」

「新しき教団を作るためには有能な組織者が必要だ。わ

しの見渡したところ、現在の念仏ひじりたちにはその器量がない。幸西ご房、おぬし一人だけなのだ」

「……」

「法然ご房を説き、烏合の衆に似た念仏ひじりたちに、統一の号令をかけられるのは、おぬしのほかにはいない」
「待て、行空」

「何か」

「わしは念仏者ではない。南谷の学僧だ」

「いや、念仏者以上に、おぬしは念仏を知りつくしている」

「法然ご房の身边にも幾らだって学徳兼備の高足がいるはずだ。例えば法蓮房信空。あの人は黒谷以来、法然ご房の形影となってきた。立派な念仏者だ」

「信空上人が立派な人格なのは承知だ。だがその立派さは、じつは法然ご房自身にも通ずるもので、余りにも清潔すぎる」

「わしが清潔ではない、と言うのか。俗僧なのか」

幸西の反論を、行空はまともからハジきかえした。

「そうだ。俗僧だ。少くともおぬしには俗な才智と願望がある。聖なるものと共存している」

ずばり断言されて、幸西は再び重い沈黙へおちこんだ。明敏な頭脳と、こまやかな神経の持主だっただけに、幸西は行空の荒々しい断定に打ちひしがれたのである。反論する前に、自己分析や内省が幸西をとらえてしまう。行空がなおも滔々と新宗樹立の構想を述べたてている間、一語も発することは出来なかった。

やがて、対応した行動は、しゃべりまくる行空を置き去りにして、不動堂を脱け出てゆくことであつた。

三

成覚房幸西。

その出自は明確でない。平氏一門に生い立って、幼年の日から比叡山へこもった、と伝えられているだけである。だが、「幼年の日から」には幸西だけが知っている数年間の空白があつた。

十八歳の春、一度下山している。母の訃報に接し葬儀に列するためだった。

母は平相国清盛の弟経盛の娘で、あまり見栄えのしない公卿へ嫁ぎ、幸西を生んだ。幼年で山へ追いやられたのも貧乏公卿の生活苦からであつた。

しかし母が死んだころ、実家の経盛一族は今をときめく権勢の中心に坐りこんでいた。葬儀もきらびやかで、下山した幸西はいきなりまばゆい俗世界へ身を投じた結果になった。

そのまま比叡山へは戻らなかった。恋を得たからである。相手は小松内大臣重盛の娘で、幸西より三つ年上だった。二人は結婚し、正式の官位はなかったが「少将」と呼ばれて数年間の新婚生活を送った。

後になって、幸西を「鐘下ノ少将」と呼ぶ者が出たのも妻の側から洩れた情報であろう。鐘下は、南谷で居住する鐘下坊を指す。

新婚生活が数年、正確には四年と三カ月で終息してしまったのも平氏一門の急速な没落だ。幸西は妻子を捨て、再び比叡山へ逃げ戻った。

その後、妻や子がどんな暮しをしているのか、消息は全くなかった。幸西自身も知ろうとはしなかった。空白の数年間を明示することは、わが身の危険を約束する行為でもあった。

南谷へ、黄昏は迅速に訪れてくる。峯々では未だ夕映えが輝いているのに谷底は薄墨色でおおわれてしまう。

幸西は、せせらぎに添ってそんな黄昏の翳を踏みながら、あてどもなく歩いた。

いつかは都へ立ち戻るであろう、という淡い予感が、あの逃亡時からすでにあった。平氏究明の手がゆるんだら、必ず愛する妻子のもとへ帰ってゆくのだ。

どこで、どんな暮しをしているのか、それは知らぬ。しかし都へ戻りさえすれば必ず探がしあてることが出来る、と確信していた。

その都へ帰る機会が、いま法本房行空によって投げ与えられた。

法然を口説いて、新宗専修念仏宗を結成する組織者としての下山か。つまり自分は念仏ひじりに転身するといふのか。

たしかに幸西は若いときから念仏思想に深い関心を寄せてきた。関連した經典も徒渉したつもりである。

だが、念仏ひじりは嫌いであった。ことに法本房行空が唱導するような念仏はご免だった。

さつき行空は一念義に触れた。数年前に幸西が教えたとしているが、あれは行空の錯覚だ。もっと以前、幸西が下山して妻と新婚生活をしていたころ、南谷で同居し

た旧誼を頼って来訪した行空に一念往生義を説き聞かせたはずであった。

「なるほど、それで女が口説ける」

と叩いた行空の軽口を忘れることが出来ない。

ただの座興、軽口ではあろう。しかし在家生活にひたる念仏ひじりの、このような軽率で粗暴な肌合いが、幸西には何としても嫌なのである。

行空の正体はほぼ把握出来るにしても巷にはバケ物のような念仏ひじりが幾らでもいるはずだった。そんな連中を糾合して新宗を樹立したって、それが何になるというのか。

それにしても唯一点で幸西が、行空の申し出をきっぱりと拒否出来ぬ理由は、時の流れであった。滔々と世をおおいつくす念仏の勢威……それはひじりたちの人格なぞとは無縁であろう。ましてその頂点には法然という偉大な存在が坐っているではないか。

せせらぎに添ってさ迷う幸西の爪先が、ようやく一つの方角を目ざしはじめた。

これは、師僧の意中をただしてみる必要がある、と思いがまとまったのである。

師匠の証真は、この奥宝地房に在宅いるはずだった。師の証真は、堂奥でひとり夕餉の粥を食していた。

「よろしいでしょうか」

幸西は、かたわらへすすんだ。

「夕餉は済んだか」

「未だですが、あちらに用意してあるはずです」

「此処にも余分がある。よかったら食べてゆくがよい」と、椀をさし出した。なるほど木鍋には炊きたての芋粥が盛りあがっていた。しかし幸西は手を出さなかった。

「念仏ひじりについて、どうお考えでしょうか」

いきなり切り出してみた。

「念仏ひじりか……いや、そのことでいま頭を痛めているのだ」

「何か……」

「うむ。聖光房弁長がな、念仏ひじりになってしまったぞ」「えっ、弁長が……しかしあれは今、故山の筑後へ帰っているはずでしょう」

聖光房弁長。後に鎮西上人と呼ばれ、浄土宗の二祖になった碩学である。幸西とは同年輩で、同じ証真門下の俊英であった。

「それがな、すでに筑後からは戻ったのだが、此処は来ずにそのまま東山の法然のもとへ入室してしまったのだ」

「また、何で」

「未だ詳細は聞いておらぬが、これによると故山でよく思い決するところがあつたらしい」

証真は経台にのせた読みさしの書面を、幸西に手渡した。

麗筆で、簡潔に念仏入門の経緯を告げてきている。

無常を痛感致し。

この句が矢ぶすまのように幸西の眼を射た。

弁長は篤信、好学の男であつた。

俊敏とは言えぬが、それだけにめつたに物に動じない重厚な性格である。日常の行動も慎重で、とりわけ師の証真には絶対服従だつた。

それが、書面一つだけで、比叡山を捨てたと言うのか。

「法然房の教えは、たしかに正しい。これからの仏法は、あの人のように巷で生かされねばならない。その意味で弁長が東山へ入室することに、わしは異を唱えない。ただなあ、あれに去られると、この南谷の将来はどうなつてしまうのか」

弁長に待むところが大であつたにちがいない。

「弁長も念仏ひじりになつてしまったのですか」

幸西はウワ言のようにくり返している。

あらゆる意味で、弁長は幸西にとってライバルである。自分に欠除したものを具備しているだけに畏敬の念も寄せてきた。もちろんライバルである。高い次元での憎しみが無い、と言つた嘘になる。

しかしいま幸西が受けた衝撃は、自分が迷っている進路を、ためらいもなくあの弁長が走り抜けていった、という事実であつた。してやられた……これが率直な幸西の実感だつた。

「のう幸西。おぬしだけは此処にいつまでもとどまつていてくれよ。南谷が減ぶ。お前にまで去られたら、天台教学は形骸となつてしまうのだ」

哀願せんばかりの師の言葉。

幸西はこの瞬間、不思議な感情が湧いてくるのを、おさえることが出来なかつた。感情、というよりも決断であつた。

弁長が法然門へ走ったか。よろしい、わしも念仏ひじりに身を投ずるであらう。

(つづく)

二 編集後記 二

○ものの見方や考え方は、それぞれの人の性格や置かれている立場によって、色々と異なる。十人十色、人さまさまなどというが、顔付きや姿かたちばかりでなく、心のもちよう、その生き方の一々までまことに千差万別である。それだけに、同じ事柄についての意見や感想が、まったく逆の反対の視点で捉えられ、しばしば思わぬ対立抗争を招くことも多い。たとえば歴史の「コマを取り上げても、かつては絶対と思われた道理が、社会の変容とともにいとも簡単に崩れて行く。また、「こんなことを」と批難された行為も、後になってみるとすばらしい快挙であつたりする。いわゆる価値観の相対化——一面的な視野でなく、多面的、複合的な認識によって、ものごとに柔軟に対処する姿勢がもっとも必要とされるところである。しかし、これはなかなか容易なことではない。いっそのこと、はか

なくして、あまりにも卑小なこの身みずからを広大な宇宙の真只中に置いて、そりかえって居直ることができれば……、つまり、すでにこの地球の科学力をして、「地球は青かった！」というメッセージや月の裏側の写真がもたらされたように、この太陽系をも小さく含めた銀河系宇宙をはるかに見はるかす視座を——、それは私たちが夜空を仰いで、月明りにひたり、星のまたたきに胸をときめかせているありようと比べて、なんと対蹠的なことであろうか。しかしそこにおいても、人間の営みの真実はつねに変わらないようにも思えるけれど……。

○五月の縁に新鮮な空気、衣更えをした若者たちの明かるい装いが活気にあふれている。まことに、すがすがしいこの時分を心待ちにしていた人たちは多いことだろう。五月晴れの青さが、白い雲を浮かべて天に澄む。

五月富士夫病床をいつ捨てむ あき子
初夏に開く郵便切手ほどの窓 朗人

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十三年 四月二十五日 印刷
昭和五十三年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二二三 振替東京八一八二一八七番

《出版目録》

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内

浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定 価	送 料
浄土選書	① 松濤弘道著 『仏教的生き方とは?』 やさしく人生の歩み方を教える理論 と実践のハンドブック	新書判 268頁	480円	120円
	② 石上善応著 『仏像——その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を見 つめる新しい思索の書	新書判 200頁		
	③ 藤井実応著 『善導大師——生涯と金言』 「古今楷定」の教義の根源を探り、 教化の実態に迫る啓蒙書	新書判 190頁		
	④ 宮林昭彦著 『仏教とその流れ』 仏教とその歴史をやさしく説いた解 説書	新書判 208頁		
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 嵯峨野ほか	B 5 判 120頁	980円	160円
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝(鎌倉篇)・鎌倉 をあるくほか	B 5 判 84頁	880円 1000円 送料実費	
布教シリーズ	①浄土宗の葬祭 (梶原重道著) ③法然上人のおしえ (竹中信常著) ⑤仏前結婚式—その意義と式次第— (後藤真雄著) ⑥無常にめざめよ—善導大師の教え から— (安居香山著) ⑦二河白道—善導大師の教えから— (上田見宥著)	B 6 判	1部40円 300部以上38円 500部以上35円 送料実費	
	④月影の歌 (岸信宏猊下著)	B 6 判 32頁	1部60円 300部以上55円 500部以上50円 送料実費	
仏教事物解説 カード	①浄土宗 ②南無阿弥陀仏 ③三宝 ④仏壇 ⑤勤行 ⑥お灯明 ⑦数珠 ⑧木魚 ⑨檀家 ⑩中陰	ハガキ判	100部 800円 500部以上 100部 700円 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研鑽の一大集裁として明 治初年発刊の和綴三巻を一本として ここに再版	A 5 判 1074頁	7000円	280円
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』	A 6 判 364頁	1500円(送料共)	
	『浄土宗教師必携』 附1978年教師手帖 資格分限ほか取得事項記入欄、主要 宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帖 124 頁	1500円(送料共) 手帖のみ 600円(送料共)	

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十三年四月二十五日印刷 昭和五十三年五月一日発行
第四十四巻 第五号